

全国鳥類繁殖分布調査

2023年度成果報告

2024年3月31日

鳥類繁殖分布調査会

オオタカ(三木敏史)

2021年まで実施した全国鳥類繁殖分布調査、2022年まで実施した全国鳥類越冬分布調査ですが、その成果が、今年も自然保護施策や研究に活用されました。2023年度の成果をご報告します。

レッドリストの改訂に貢献しています

現在、環境省のレッドリストの改訂作業が進められています。これまでのランクの評価は「専門家の知見」ということで定性的に評価されてきましたが、今回の改訂からは、定量的な評価がより強く求められています。しかし、なかなかそんなデータは存在しません。そうした中、過去からの変化を定量的に評価できる数少ないデータとして全国鳥類繁殖分布調査や越冬分布調査のデータが活用されています。タンチョウ、オジロワシ、エゾライチョウ、ウズラ、オオジシギ、チュウヒ、ミユビゲラ、クマガラ、マキノセンニュウ、ギンザンマシコ、ヒクイナ、ヨタカの評価のためのデータ利用申請があったほか、植田が評価に関わっている種も含め、少なくとも27種の評価に活用されています。レッドリストは来年度中に公表される予定です。決まりましたら追ってお知らせします。



前回のレッドデータブック

「日本の森の鳥の変化」で9種の結果を紹介

本調査の結果に、モニタリングサイト1000の調査結果なども加えて、日本の森の鳥の現状を紹介する連載をバードリサーチニュースに掲載しました。分布変化が特徴的な9種について紹介しました。以下のURLよりご覧

いただけます。

ホトトギス	https://db3.bird-research.jp/news/202304-no2/
アオゲラ	https://db3.bird-research.jp/news/202305-no1/
キクイタダキ	https://db3.bird-research.jp/news/202306-no2/
ヒガラ	https://db3.bird-research.jp/news/202307-no1/
ゴジュウカラ	https://db3.bird-research.jp/news/202308-no1/
アカハラ	https://db3.bird-research.jp/news/202309-no1/
コルリ	https://db3.bird-research.jp/news/202310-no1/
キセキレイ	https://db3.bird-research.jp/news/202311-no1/
アオジ	https://db3.bird-research.jp/news/202312-no1/

2件の学会発表をしました

日本鳥学会と日本生態学会で、以下の学会発表を行いました。

植田睦之・葉山政治・植村慎吾・大澤剛士. 1990年代から2010年代にかけての森林性鳥類の垂直分布の変化
日本鳥学会大会

日本では、低標高の場所で公園や雑木林の樹木の生長、中標高で植林の生長が進んでいて、それに温暖化による分布の変化が加わり、照葉樹林帯の鳥は低地と高標高で分布を拡大していて、針葉樹林の鳥は低標高の林で分布を拡大、亜高山の鳥は分布を拡大しておらず、逆に減少していることなどがわかりました。

山浦悠一・河村和洋・先崎理之・北沢宗大・西海功・片山直樹・天野達也・石郷岡康史・須藤重人・大澤剛士・植田睦之. 回復か減少か：気候・土地利用変化下での日本の繁殖鳥類の動態
日本生態学会大会

1970年代、1990年代と比べて多くの鳥が分布を拡大していたものの、個体数は逆に減少しているものが多く、特に分布域の南側での個体数の減少が顕著だということがわかりました。

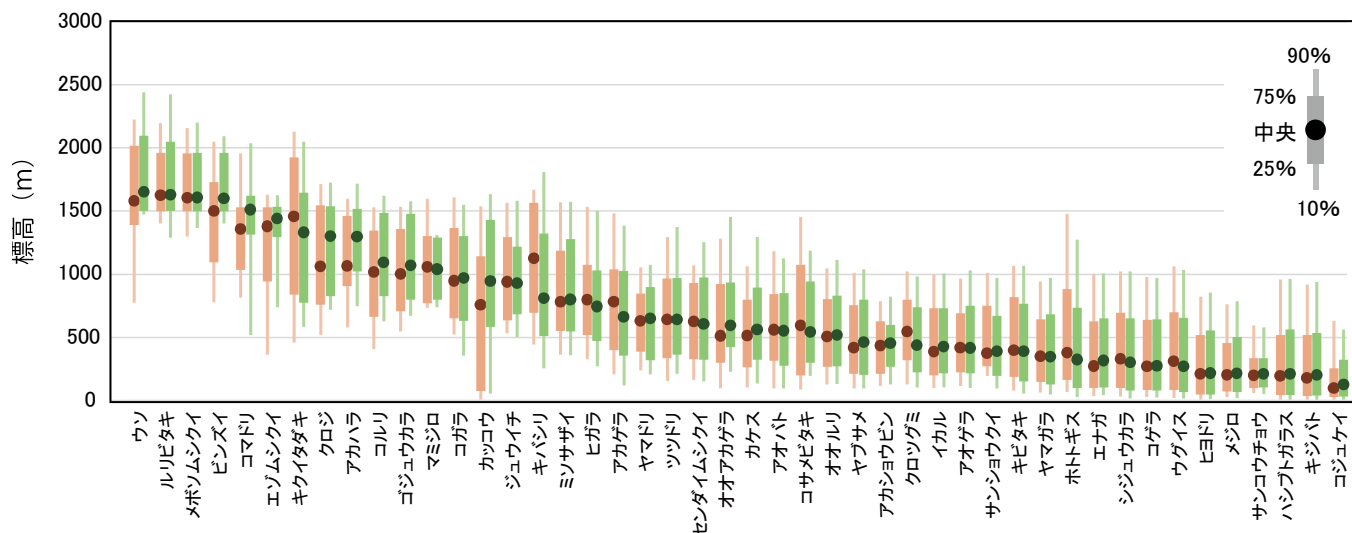


図1 1990年代から2010年代にかけての、森林性鳥類の垂直分布の変化。近畿から関東にかけてを対象とした。

標高の学会発表に関連して、近畿から関東にかけての主要な森林の鳥の標高分布を示すと、標高の高い場所に生息する種には、低標高の場所からいなくなって分布標高のあがる種が多いことがわかります(図1)。それ以外で目につくのは、最近、スギ林で見られるようになってきているキクイタダキやキバシリの分布が下がっていること、またカッコウが低地から減っているのも特徴的でした。

スズメの減少が論文にまとまりました

繁殖分布調査のデータを使って、スズメの研究で有名な三上修さんが、スズメの状況について、論文にまとめました。18年間で62.1%に減少していると推定され、農地面積が広く、気温が高い場所で減少傾向が大きいことが示されました。

三上 修 (2023) 鳥類繁殖分布調査の第2回(1997-2002)と第3回(2016-2021)の間に見られるスズメの減少. *Bird Research* 19: A21-A30.
<https://doi.org/10.11211/birdresearch.19.A21>



スズメ(撮影:三木敏史)

東京都でも、三上さんの解析と同様に、農地があるところでは減っていて、意外なことに、都心部では増えていることが東京都鳥類繁殖分布調査の結果からわかっ

てきています。2013年の繁殖期に都心部の状況を調査してみたのですが、電柱を利用してたくさんのスズメが営巣していました。ただ、ヒナの声のする巣が少なかったのが気になったところで、2024年の繁殖期には繁殖成績の調査もしたいと思います。その結果など、また、お知らせいたします。

オオタカの論文でデータが活用されました

新潟大学の夏川遼生さんの論文の中で、オオタカの生息適地が生物多様性の状況を示すデータとして繁殖分布調査のデータが使われました。オオタカの生息適地は生物多様性が高いけれども、法的に保護されているところは少ないという結果が得られたそうです。

Natsukawa H et al. (2023) Utilizing a top predator to prioritize site protection for biodiversity conservation. *J Environmental Management* 347: 119110.

その他の成果

記事

植田睦之 (2023) セグロカッコウ. *野鳥* 2023年9/10月号: 20-21.

植田睦之 (2024) 冬鳥が留鳥に 日本の鳥の「渡り性」の変化. *バードリサーチニュース* 2024年3月: 1
<https://db3.bird-research.jp/news/202403-no1/>

講演

山崎優佑:アトリやカシラダカは減っている?野鳥の越冬状況の変化について.日本野鳥の会東京支部ヤング探鳥会交流会.

植田睦之:鳥類をとおした自然環境の広域モニタリング.筑波大学自然保護寄付講座.